

“For here, he doth not fear, who can apply”

ベン・ジョンソン『錬金術師』におけるサイモン・フォーマン

“For here, he doth not fear, who can apply”
Simon Forman in Ben Jonson's *The Alchemist*

森 ゆかり
Yukari MORI

Abstract With an extensive manuscript research done independently by B. Traister and L. Kassell, we now have a clearer picture of Dr. Simon Forman (1552-1611), a notorious astrological physician in London, caricatured as “Oracle Forman” in Ben Jonson's *the Devil Is an Ass*. In this paper, I will focus my attention to *the Alchemist*, first performed in 1610, to see how much there are in common between Subtle, a charlatan in *the Alchemist*, and real-life Simon Forman, who was at the height of his reputation when Jonson wrote this comedy. Lurking behind John Dee and Edward Kelly, who were explicitly mentioned in this play but deceased at the time of the first performance, Forman practiced the same kinds of natural magic and alchemy as those performed by Subtle and Face on the stage. Since Forman boasted a considerable clientele in Jacobean London, including one of the actors on the stage in 1610, Jonson's satire pointed to the credulity of Forman's potential clients in the audience as well. In addition, by changing the historical date of the statutory prohibition of alchemy in 1403-1404 with the treason act in 1541, Jonson succeeded in linking radical puritans and papists with those alchemical charlatans.

1. はじめに

1610年、グローブ座で初演された Ben Jonson の喜劇、*The Alchemist* は、1) ロンドンでペストが流行した折、ブラックフライヤーズにある屋敷を主人の Lovewit が留守にしている間、一人残った召使い頭の Face が、錬金術師 Subtle、売春婦 Doll を屋敷に連れ込んで、いかさま稼業を始める芝居である。錬金術師サトルのモデルは、エリザベス朝時代の数学者で魔術師の John Dee (1527-

1608) であるとも、ランベスで開業していた占星術師で医師の Simon Forman (1552-1611) であるとも言われている。本考では、『錬金術師』で風刺されているのは、イエイツが『シェイクスピアの最後の夢』で主張したような薔薇十字主義者としてのディー²⁾ではなく、劇中直接名指しされ、プロトタイプとして設定されたディーに酷似し、初演当時まだ存命中だったフォーマンこそが、『錬金術師』の風刺の「軸」を構成していることを見てみたい。ジョンソンは彼一流の強靱な想像力で、同時代の急進派ピューリタン、教皇主義者をも錬金術師と一括し、いかさま師として愚弄の対象にする。*Volpone, or the Fox*

(1606)、*Epicione, or the Silent Woman* (1609)と、外国または架空の舞台設定で仕掛けられた一連の喜劇に続く3)『錬金術師』では、舞台上で当てこすられる当時隆盛を極めたフォーマンと、観客席でこれを見るフォーマンの潜在的顧客を通して、芝居小屋にいる「今、ここ、そしてあなた」が風刺の対象とされることになり、ジョンソンの強靱な風刺が、劇場を超え、ジェームズ朝ロンドンに向けて、その毒を増すことになるのである。

2. ディーとケリー

ディーについては、劇中、第2幕第6場で、その名に直接言及がある。ラブウィットの屋敷でいかさま商売を始めたサトルの許にタバコ屋のドラッグが商売繁昌の幸運の看板を考えて欲しいと訪ねて来た場面である。

サトル

まず1個の鈴(a bell)、これでエーベル(ABEL)だ。その横にディーという名の男が毛織の(rug)ガウンをつけて立っている、Dとラグでドラッグ(DRUG)となる。さらに、ディーと並んで一匹の犬がアー(ER)とうなっている、それでドラッガー、エーベル・ドラッガー(ABEL DRUGGER)、これが彼の看板だ。これこそ神秘の象形文字(hieroglyphick)というわけだ!4)

イエイツも指摘するように、エーベル・ドラッガーという名前のためのこの記憶術的図像は、同時に「その名がディーという人物」の像をあらわす神秘的で魔術的な象形文字であり、ここでジョンソンは、ディーの代表的著作である *Monas Hieroglyphica* (1564)のことを、軽蔑を交えて当てこすっているとされる。5)

ちなみに自然哲学者のディーはこの著作中、人間の発明によるのではなく、事物の本質を具現した神的創造の言語が存在し、人祖アダムはこの言語を使うことによって、神や天使と意志疎通をはかることができ、神から直接、被造物たる自然に関して完全な知識を与えられたのだと主張していた。6)しかしアダムの墮罪により、人類は、この普遍的言語と同時に「自然の書」を解釈する能力の大半を失ってしまったとされている。失楽園後、アダムが辛うじて断片的に保持していたこの普遍言語も、

ノアの洪水、バベルの塔の破壊と、人類が神の意志から離れるに従い、完全にこれを喪失してしまうことになるのだ。7)

一方、ディーが影響を受けた Johannes Reuchlin や、Guillaume Postel は、聖書の言語のうちでも、特に「ヘブライ語」がこの太祖の言語に最も近いものだとしている。8) ディーをはじめ、Pico della Mirandola 以降のキリスト教カバラ主義者であれば、『錬金術師』第2幕第2場のサトルは、アダムが錬金術の論文を「ヘブライ語」で書いたと主張するはずである。9)アダムがどの言語を話したのかという話題は、当時色々な変種を生んでいたようで、例えばスウェーデンの哲学者、Andreas Kempe(1622-1689)は、神がアダムにスウェーデン語で話し、アダムは動物にデンマーク語を、蛇はイブにフランス語で語りかけたとする珍説も存在している。10) 確信犯のジョンソンはここでもあえて、アダムが「ヘブライ語」を話していたとは言わず、オランダにおける再洗礼派の地理的拡大を揶揄しつつ、わざわざ「高地オランダ語」と言い換えて、聴衆の笑いを誘ったのである。11)

マモン

君は古代の文書を、記録を、信じないのか? モーゼとその妹ミリアム、それにソロモンもこの秘術について本を書いた、いずれ見せてやる。アダムの書いた論文もあるんだー

サーリー

まさか!

マモン

賢者の石について、高地ドイツ語でかいたものだ。

サーリー

あのアダムが高地ドイツ語で?

マモン

書いたので、それが人類最初の言語と証明されるわけだ。12)

ディーは更に、前述の *Monas Hieroglyphica* で、オカルト哲学を習得した達人(adept)は、人類が喪失した普遍的言語と力を回復し、これによって墮罪後の被造物界を太古の完全性に回帰させることが可能であると考えていた。13) 墮罪後の人類で唯一、神によって天に引き上げられたエノクは、楽園で天使から神についての完全な知識を伝授されたが、14) ディーは、霊媒を通して天使と会

話することにより、我々が既に無くしてしまったアダムの言語を復興させ、アダムが楽園で持っていた神の創造の秘義、特に錬金術を知ることができると考えていたようである。15)『錬金術師』のサトルもまた、「この石こそ天使(Angels)の御業、自然の奇跡、雲に乗って東から西へと飛翔する神の秘法(divine secret)、その伝統は人間にはなく、霊(spirits)に由来するのです」として、錬金術の起源について、ディーと同じ見解を採っている。16)

アダムが錬金術を知っていたかどうかは、16世紀から17世紀にかけて創世記註解者の間で盛んに議論されたが、17)アダムの錬金術を知るために天使と対話しようとしたディーの霊媒の一人が、悪評高い Edward Kelley であり、『錬金術師』第4幕第1場で、皇帝ルドルフに求められたケリーとして言及されている。18)後に Meric Casaubon が *A True and Faithful Relation of what happened for many years ...* (1659) を出版、ディーとケリーが行った天使との会話を公にして、二人の黒魔術師としての評判を決定的にしたのだが、生前ディーは、天使との会話のことを自らの著作等で公的に言及することはなかったようである。19)しかしながら、皇帝ルドルフに招かれて滞在したプラハで、ディーとケリーはカトリックに帰依、ケリーがカトリック教会で天使との会話について告解したため、この噂が広がって、既に生前から二人は、教会当局ばかりでなく、海を超えてはるか母国の英国でさえ、怪し気な魔術師として猜疑の目で見られたのである。20)

実際どのような形で天使との会話が行われたのかについては、Harkenness の研究に詳しく報告されているが、天上界からの霊気を強めるために水晶玉を用い、天使がケリーに伝えたこと、ケリーが目撃したことをディーが解釈、記録するという形で作業が進められたらしい。21)妻をはじめ、所有物全てをディーとケリーが共有することなど、22)ディー自身は天使のお告げを真剣に受け止めて忠実にこれを守ったらしいが、天使のお告げは、『錬金術師』のなかでも何度か当てこすられており、「水晶玉に映る影をお告げの天使と称する」23)、「エンジェル金貨4枚」「このエンジェルで先生を誘惑」し、「学問と愛を危険へと誘う」24)等、ディーとケリーによる天使対話に関する言及は明確だ。サトルとその助手、召使い頭のフェースがドル、プライアントと、二人で女を奪い合うのも、妻を共有するディーとケリーの風刺であるとする

批評家も多い。

また、第4幕第7場で、サトルは「われわれは永久にロンドン塔に監禁され、そこで国家のために黄金を作り、二度と出てこれまい」25)と、逮捕の恐怖を語っているが、実際、ディーの帰国後もプラハに留まり、ルドルフの求めで錬金術の実験を行っていたケリーは、錬金術の秘密を隠しているとして、皇帝により監獄に入れられ、二度目に逃走しようとした際、死亡したと伝えられている。26)もっとも君主に監禁される錬金術師のトポスは、錬金術伝承に広く見られるもので、『錬金術師』第2幕第5場で言及されるレーモン・ルルは、Cremer 僧院長の招きで渡英、国王エドワードの前で錬金の実演をするが、騙されて投獄されたと伝えられている。27)近いところでは、女王エリザベスも Alneto または Alvetanus と称する大陸の錬金術師から錬金術著作を献呈されたが、実験に失敗するとエリザベスによって、ロンドン塔に収監されたという。28)

最後に『錬金術師』では、「お偉い大主教たちを非難して耳をそがれ、さらし台に立たされる」29)ピューリタンの刑罰に連動させて、錬金術師や魔術師もまた「さらし台に首を突っこんで耳をそがれる」30)と、耳そぎの刑罰が何度か言及されているが、ケリーもまた、ディーの許で働く前、ランカスターで偽造のため同じ刑罰をうけており、31)ディーとケリーへの直接言及がまた一つ加わっている。

ここで面白いのは、ジョンソンがフェースの口を借りて「ヘンリー八世が治世33年に発布された魔術禁止令」32)に違反していると、意図的に史実を曲げた台詞を言わせている点である。英国で錬金術が禁止されたのは、1403-1404年、ヘンリー5世の治世第4年のことであり、33)ヘンリー8世の治世33年すなわち1541年に発布された法令の中には魔術に関するものは存在しない。1541年に発布された法令のうち、極めて重要なのは、教皇主義者の蜂起である1537年の Northern Rebellion をうけて制定された反逆罪に関する法令である。34)ジョンソンは第1幕第1場の冒頭のこの部分で、意図的に錬金術と反逆罪をすり替えており、国際的な勢力拡大をもくろむ亡命ピューリタンや教皇主義者勢力を、反逆罪という共通項でくくり、錬金術と結びつける。意図的な史実の差し換えによって、ジョンソンがこの芝居で風刺しようとした錬金術師、急進派ピューリタン、そして彼等に口汚く批判されるカトリック教皇主義者が、

ジョンソン一流のレトリックの力業で「いかさま師」としてひとくりにされているのを見ることができるのである。

3. サイモン・フォーマンのオカルト魔術

前セクションでは、魔術師としてのディーのプロトタイプが、どのような形で『錬金術師』の中で展開されているかを概観した。The Devil Is an Ass(1616)と異なり、ジョンソンは『錬金術師』においてサイモン・フォーマンを直接名指しすることはない。しかしながら、『錬金術師』初演当時すでに物故していたディーとは対照的に、フォーマンは1603年6月、ケンブリッジ大学から医学の学位を授与されて、1579年6月以来、魔術や無認可診療等で相次ぐ逮捕、収監を繰り返した苦難の時代に終止符を打つと、35)これ以後1611年に死亡するまで、フォーマンの名声は絶頂に達する。プロローグで「特定の人にあてつけたと言われても作者は平気です」("For here, he doth not fear, who can apply") 36)と、予め断った上でのあてつけは、意図的に直接言及をしない魔術師フォーマンを殊更、人々の意識に上らせることになる。第4幕第6場で「天文暦でペストに痔瘻に梅毒なんでもなおす」37)フォースタフ博士は、他でもない学位を授与されて間もないフォーマン 38)「博士」なのである。

以下では、『錬金術師』のサトルと、フォーマンの類似性について、1) 手相、方角占い、2) 天使の食べ物としての賢者の石、3) ペスト治療の3点について比較検討してみたい。

さて、Traister (2001)と、Kassell(2000, 2001)によるオックスフォード大学 Bodleian Library 所蔵のフォーマン自筆手稿の研究により、彼の医学、オカルト、自然魔術や錬金術について新たな知見が加えられようとしている。まずは手相学から見てみよう。ご登場いただくのは前セクションで見たタバコ屋ドラッガー氏、商売がうまくいくかが心配の御仁の手相を見て、第1幕第3場のサトルは手相学の基礎を開陳する。

サトル

手相学においては、親指は金星のもの、人さし指は木星、中指は土星、薬指は太陽、そして小指は

水星のものとなっておるが、... 39)

Herford and Simpsons も指摘するように、上記引用は、J.B. Porta の *Coelestis Physiognomia* (1603) V ch. xiii にある記述と一致するという。40)更に興味深いことに、当時ロンドンの対岸ランベスで開業していたフォーマンも同じ手相術理論を使って顧客に占いをしていたようである。Bodleian Library 所蔵 MS. Ashmole 205 の 245r は、フォーマンが自らの右手をなぞり、掌にある線を描いた自筆手稿だが、各々の指の付け根にそれを支配する惑星の記号が記入されており、『錬金術師』でサトルが解説する上記引用と同じ割り振りがなされている。41)

『錬金術師』第1幕第3場の上述場面続き、いかさま師サトルは、タバコ店店主ドラッガーに、商売繁盛を招く店のレイアウトをアドバイスする。

サトル

では出入り口は南、広い側面は西になさい、それから店の東の側面には、高い位置に、マスレー、ターミエル、バラボラートと書く、北側には、リール、ヴェレル、シールと書く。いずれも水星の、つまり商売の精霊の名前であり、商品から蠅を追い払ってくれる。42)

Herford and Simpsons は、各方角を司る精霊について、Cornelius Agrippa の *De Occulta Philosophia* (1567?) に付録として付けられた *Heptameron, seu Elementa magica Pietri de Abano philosophi* の中で同じ名称をあげていることを指摘し、これが全くのでたらめではないことを既に証明している。43) Traister は、フォーマンも方角占いを行っていることを指摘し、その類似性を認めている。フォーマンの記録によれば、1597年2月、徒弟見習い期間を終えた薬剤師 Mr. Woodward は、店を構えるのによい方角を尋ねにフォーマンの許を訪れており、師匠の店舗からどちらの方角に店を構えるのがよいか、との問いに、東または東南、あるいは西はストランドまで行きなさい、というのが、フォーマンの答えだったという。44)

こうしたオカルト的魔術に関する人々の感受性は、現代の我々にはなかなか実感し難いものであるが、例えば、『錬金術師』第1幕第2場でフェースが「生まれてきたとき頭は幸運の大網膜に包まれていた」45)という民間伝

承を語るが、これは近世解剖学の父、ヴェサリウスでも彼の革新的解剖学書 *Fabrica* (1543)で、自らも大網膜をかぶって誕生したことに言及し、読者に自分が特別な力に恵まれていることを示唆している位なのである。46)

さて次は賢者の石についてだが、フォーマンはその後半生を通じて錬金術研究を行ったらしい。現在オックスフォード大学 Bodleian Library に所属されているフォーマンの自筆手稿である Ms. Ashmole 1494 と 1491 は共に、“Of Appoticarie Druges”という題がつけられ、錬金術用語がアルファベット順に並べられて解説されているという。47) Ms. Ashmole 1472 と合わせ、現存するフォーマンの錬金術手稿には、George Ripley(1415-1490)、Raymond Lull(b. ca. 1232-36.-d. 1315)、Thomas Norton(?1433-1513 か 1514)等の手になる錬金術著作や、前セクションで考察したディーの霊媒をつとめた Edward Kelly 等の引用がされているといることである。48)

決して裕福な境遇ではなかったフォーマンは、1573年から翌年にかけて、オックスフォード大学の貧しい給付生として在籍した後、49) 紆余曲折を経て、1591年にはロンドンで医師として開業した。折しもペスト大流行の折、ほかの大勢の医師達が、医療活動を放棄したなか、ロンドンに留まって治療を行ったため、その評判は高まり、多少の経済的余裕を持つことができたらしい。50)

『錬金術師』のサトルのように、何らかの経済的基盤がなければ錬金術実験などは行えないからである。フォーマンの日誌や診療記録によると、彼は1595年の四旬節には、上で挙げた錬金術著作に出てくる実験器具や炉の準備をして、賢者の石の生成を始めたとされる 51) 同時に、元来医師であるフォーマンは当然のことながら、薬草の蒸溜も行ってシロップやなめ薬を製造していたという。52) 占星術師でもあるフォーマンらしいのは、例えば1599年3月27日、8月8日に自ら占星術を行い、錬金術実験が成功して、賢者の石を手に入れることができるかどうかを占っている記録なども残っていることである。53)

フォーマンの手稿には失敗に帰した錬金術実験の記録が残されており、1596年3月、金や水銀の精製中、容器やガラスを破損してしまったり、54) またある時には、rose water とクラレット酒で牛の足を長時間煮詰めて粗布で濾した後、シナモン、しょうが、砂糖を加えるなど、55) 有機物を材料に使った錬金術実験も行っていたようである。本稿で後述することになる“Geber’s cook”

に文字通りぴったりの錬金術実験だが、56) Ms. Ashmole 1491 の 1269-1270 には、錬金術実験用の各種容器のスケッチが残されており、57) ジョンソンの『錬金術師』で言及される、フラスコ “bolts-heads” (II. ii. 9)、連結瓶 “aludels”(II. iii. 35)、卵形容器 “Gripes egge”(II. iii. 40)、ペリカン首付蒸溜器 “Pellicane”(II. iii. 78)等々、多種多様な容器の名称を彷彿とさせる。

さて、卑金属を金や銀にかえるという賢者の石は、一般に錬金術でも、秘義の秘義とされ、万物の中にある不完全性を取り除いてこれを完成させる能力を持ち、不完全性を持つ卑金属を完成して、金と銀に変えるものである。58) フォーマンは賢者の石を4つに分類するという。まず第1の石は、ヘルメスが所持していたもので、“animal stone”もしくは“angelic stone”と呼ばれる。モーゼが保持していた賢者の石は、“magical stone”または“prospective stone”とされ、ソロモンが持つのは“vegetable stone”または“growing stone”である。最後に、中世錬金術の権威であるルルとリプリーが持っていたのは“mineral stone”と呼ばれる石であるという。59) このうち、「天使の石」は、疾病から人体を守り、「天使の石」を使って人間は、長寿や真の叡智、夢の解釈が可能になると言う。

The angelical stone is true medison to mans bodie against all infirmities and makes a man life longe and by that stone he obtained wisdom and knowledge of thinges in dreams & otherwise. 60)

ここでもう一度、前セクションで引用した第2幕第1場、アダムが「高地オランダ語」で書いた錬金術の論文のくだりを引用してみよう。アダムだけでなく、旧約聖書の太祖も登場する部分である。

マモン

君は古代の文書を、記録を、信じないのか？モーゼとその妹ミリアム、それにソロモンもこの秘術について本を書いた、いずれ見せてやる。アダムの書いた論文もあるんだー

サーリー

まさか！

マモン

賢者の石について、高地ドイツ語でかいたものだ。
サーリー
あのアダムが高地ドイツ語で?61)

ここで注目したいのは、サトルの錬金術理論の代弁者ともいうべきマモンが、アダムばかりでなく、モーセとソロモンも錬金術の論文を書いたと言っているところである。フォーマンの四分類のうち、モーセは「魔術の石」または「予言の石」についての、ソロモンは、「植物の石」または「成長の石」についての論文を書いたのではないだろうか。フォーマンが行った石の4分類は、フォーマンばかりでなく、例えば、後に Elias Ashmole が英国錬金術伝統を *Theatrum Chemicum Britannicum* (1652) に集大成した際にも、その序文で説明しているものである。アシュモールは、彼が所蔵していた膨大な数の写本、博物標本、珍品などをオックスフォード大学に寄贈し、これをもとに1683年、同大に Ashmolean Museum が開館、オックスフォードの科学研究・教育に貢献したのだが、62) 彼によると、「鉱物の石」は、地上の不完全な物質を完全にし、どんな卑金属も金または銀に変え、火打石であればルビー、サファイア、エメラルド、ダイヤモンド等の貴石に変えるという。63) 「植物の石」は、人、獣、鳥、魚や樹木、植物、花などを成長させ、実らせ、色や香りをよくする効用があり、64) 更に、別称を「予言の石」ともいう「魔術の石」は、世界の隅々まで見通し、動植物の言語を理解し、天体の影響を観察する能力を付与するという。65)

最後に「天使の石」であるが、これは、非常に“subtill”であり、手で触れたり重さを感じることはないが、味だけがするのだという。この石は、“quintessence”であり、その内に腐敗する物質を含まないため、神的、天的、及び不可視の能力を人間に与え、天使に遭遇し、天使と会話する能力とともに夢や啓示を解釈する能力を与えると言う。66) 実は、先述のディーと同様、フォーマンもまた天使会話を行っていたことが、手稿の研究から明らかになっている。彼の最初の試みは1588年に遡り、手稿には、同年、“began to practice foiygomeracy [sic.] and to calle angelles & spirites,”との記録が残されている。67) フォーマンは特に医療診断等、天使を特定の目的のために呼ぶ方法を記した文献を何度も筆写しているとのことである。68)

興味深いことに、“St. Dunston”は、天使を呼ぶと言う

この「天使の石」を別名、「天使の食べ物」と呼んでおり、人間の体を腐敗から守り、食べ物無しでも長く生きることを可能にすると考えられていた。69)

一方、墮罪前後で、アダムが何を食べたか、族長達の長寿の原因についても、世紀の変わり目の聖書註解学者の間で論点となっていた。アダムが当初食べていたのは賢者の石であったとするのは、*A Coppie of a Letter ... by a Learned Physician* (1586) を著した I.W. であるが、彼は英国においてパラケルスス派医学を弁護した初期の人物のひとりである。70) パラケルススは、錬金術が神の創造の業に類似すると考えており、疾病が墮罪以降人間に降りかかった体の腐敗であり、かつ賢者の石が、それが付与されるものの不完全性を取り除き、完全性を付与するものならば、賢者の石によって、人間は、エデンの純粋性と健康を回復できるとしていた。71) この意味で使われた「賢者の石」は、フォーマンやアシュモールの四分類で言及されたものと同じであり、中世以来、「天使の石」とも呼ばれていたもので、例えば、Roger Bacon (1214?-1294) は、『大著作』でその効用を以下のように述べている。

... Aristotole said to Alexander, “I Wish to disclose the greatest secret”; and it really is the greatest secret, for not only would it procure an advantage for the state and for every one his desire because of the sufficiency of gold, but what is infinitely more, it would prolong life. For that medicine which would remove all the impurities and corruptions of a baser metal, so that it should become silver and purest gold, is thought by scientists to be able to remove the corruptions of the human body to such an extent that it would prolong life for many ages. 72)

ロジャー・ベーコンは、墮罪前の人間は老化や病を知らず、賢者の石のみが人間を墮罪前の健康に戻すことができると主張していた。73) このように錬金術と医学を最初に結び付けたのは、ロジャー・ベーコンであるが、74) この伝統を受け継いで、『錬金術師』のマモンも、賢者の石の効用を以下のように説く。

マモン

ノアの洪水以前の古代の父祖たちが、長命であったのは、わが錬金術を心得ており、週に一度けし粒ほどの賢者の石をナイフの先でなめていたからだ、それでマルスのように元気であり、キューピットのような子を生んだのだ。(75)

さて、このようにロジャーベーコンに始まる錬金術と医学の結びつきはその後も継続し、以下に掲げたマモンの最初の台詞はダンカンも指摘するように、中世錬金術の権威である Arnold of Villanova (1240?-1311?)、*Rosarium Philosophorum* からの直接引用であり、76) この同じ文章が彼の後継者である偽ルル、*Practica Testamenti* にも見られるという。77) Arnold of Villanova、偽ルルの伝統を引き継ぐ、John of Rupescissa の *Liber de consideratione quintae essentiae* では更に、錬金術で生成される「飲用金」においてもまた、それに含まれる「第五元素」が、朽ちる体を腐敗から守り、非腐敗性を健康を与え、疾病を治療するばかりでなく、78) 折しも大流行したペストの予防と治療にも有効であることを説いて、79) アーノルド、偽ルルの伝統を更に発展させている。

マモン

これこそは造られたる自然の神秘、あらゆる病毒の感染を防ぎ、あらゆる原因によるあらゆる病気を直すのだ。一月の苦しみは一日で、一年の苦しみは十二日で、どんな長期の苦しみも一月でいやしてしまうという、医者たちが使うあらゆる薬を超える霊薬なのだ。私がそれを手にしたら、三ヶ月でわが王国からペストを駆逐してみせよう。

サーリー

そうになったらペストのために劇場閉鎖で泣いていた役者たちが、台本なしであんたをたたえる歌をうたいませう。

マモン

必ずやってみせる。それまで、召使いのものに賢者の石の一部を与え、ロンドンじゅうに毎週ペスト予防剤として配らせる、一戸に一服ずつ行き渡るようにな、値段のほうは— 80)

1592年から1593年にかけてのロンドンでペストが大流行した際、他の多くの開業医が町を放棄して避難したにもかかわらず、フォーマンがロンドンに留まっ

て患者の治療にあたったことは先述したが、これはフォーマンが流行の初期の段階で、ペストに罹患し、数週間あいた病床にあったもの、その後回復しており、一度罹患したならば、これ以降感染しないだろうとの推測の下、残りの流行期間と次のペスト流行時も町に留まり医療活動を行ったというのが本当のところであるようだ。

81) ペスト流行以降、彼は開業医としての評判を大いに上げたのだが、これ以降、ケンブリッジ大学から学位を授与されるまで、王立ロンドン内科医協会との対立が長く続き、“quack”としてのフォーマンの悪評が定着することになるのである。82) 上記の引用でもまた、サトルの代弁者たるマモンは、賢者の石がペストの予や治療の効用を持つことを説いているが、ペスト流行期間にロンドン市内にいた医師は数が限られていたのだから、以下の言及でいかにがわしいペスト予防薬を売り歩く錬金術師の姿にフォーマンの影をみることはさほど難しくない。

もともとフォーマンは、その錬金術研究にもかかわらず、実際の治療に錬金術の医学の手法を使ったことはないようなのであるけれども、83) 彼の錬金術手稿にも度々登場するアンティモニーはどう言う訳か、『ヴォルポーネ』第2幕第2場60行で、医療用に使ったいかさま薬として、ジョンソンが手厳しく風刺しているものなのだ。

5. 風刺の鎖

さて、以上述べたフォーマンとサトルの類似性が、『錬金術師』風刺のなかで、どのような役割を果たす可能性があるのかを若干考察してみたい。

Cerasano は、フォーマンがロンドン演劇界に沢山の患者や顧客を持っていたことを、残存するフォーマンの診療記録から立証した。こうした患者の一人、Burbadge の役者で当時17歳だった Nicholas Tooley は、1599年に二度、胃痛でフォーマンの診察をうけている。フォーマンが下した診断は、二度の診察ともに、腹部の“melancholy and cholera”だったらしいが、この多感な(?) 青年は1605年に、The King's Men に入団、84) 奇しくもジョンソン『錬金術師』初演のキャストの一人として、アムステルダム再洗礼派の牧師、Tribulation Wholesome を演じている。85) ジョンソンはフォーマンのところに出入りしていた役者仲間から、彼の診療やオカルト魔術の方法について、直接、情報を聞き知っていた可能性が十分あるといえる。

ちなみに、Traister(2001)は、フォーマンの診療記録が残っている1597年と1601年について細かい調査を行っており、彼が当時どの位の数の顧客を持っていたのかを推察することができる。1597年には、診療記録が残っている分だけでも、総数1819件の相談があり、このうち医療関係の相談が1616件、占い等、医療以外の相談件数203件のうち、90件が男性、113件が女性であるという。同様に、1601年の相談総数は、1183件、このうち医療相談が1023件、その他の相談160件のうち、男性が88件、女性が72件である。この2年をとっただけでも、医療相談累計数は、2639件、その他の相談累計数は、363件となっており、顧客ののべ総数は3002件に上っている。

86) グローブ座で『錬金術師』を笑い転げて見ていた観客の中には、過去、人には言えない悩みや弱さ、密かな願望をたずさえて、テムズ川を渡り、ランベスのフォーマンを訪ねた経験を持つ者もいたはずである。サトルが行う手相、方角占い、占星術、各種オカルト魔術や錬金術を、その自然哲学理論とともに「いかさま」として根こそぎにする確信犯ジョンソンの笑いは、風刺がその本質として持つ匿名性のために、単にディーやフォーマンばかりではなく、舞台の役者、これを見る観客、そしてロコミでそれを伝え聞くロンドンの巷間の人々までを、風刺の地雷で吹き飛ばされる危険に陥れる。ジョンソンの風刺は既に没したディーの影に、当時隆盛を極めた魔術師フォーマンを置くことによって、その顧客を通じ、劇場を超え、ジェームズ朝ロンドンに住む個人個人の魂深く、骨と髄を指差すのである。

ジョンソンは『錬金術師』のサトルを、悪魔と交渉を持ったファウストとしてではなく、単なるイカサマ師として描き出していることは多くの人が認めているところだ。87) Schuler は更に、『錬金術師』のプロットを丹念にたどって、錬金術、急進的ピューリタン主義、千年王国主義等のモチーフが、それぞれを象徴するサトル、アナナイアスとトリビュレーション、ドルといった登場人物が共通して持つ *obsessios* を歪めた形で使っており、プロットの展開にのせて、これらの歪なイメージが、ひとりの登場人物から、別の登場人物に引き継がれて、錬金術、急進的ピューリタン主義、千年王国主義の3つを並行的に扱うことに成功しているという。88)

ジョンソンはこのように緊密に編み込まれた登場人物

群の鎖で、自然哲学者を気取る魔術師とその顧客、世俗勢力拡大をめざす急進派ピューリタンの再洗礼派、そして彼等が悪しざまに批判するローマ・カトリックを撻りあわせ、一台の刑車に乗せて、舞台というさらし台で愚弄する。サトルではなく、このように破壊的イマジネーションを持つ劇作家ベン・ジョンソンそのものの方が逆に、サトルよりずっと悪魔的だ。『錬金術師』執筆の少し前の1606年に妻とともに *Recusant* として告発されたジョンソンではあるが、89) アナナイアスやサトルが舞台でまくしたてる反教皇主義の言説は、人格的に信頼できない語り手によってなされるにもかかわらず、風刺としてその効力を一向に減じられることがない。火薬爆弾事件の後、ジョンソンが信じていたのは、*Temporal Power* としてのカトリック教会でなかったのは確かである。"For here, he doth not fear, who can apply" 90) と、ここ、すなわち『錬金術師』が上演されている芝居小屋にいるひとりひとりを指して、「あてつけた」と言われても平気であるとうそぶくのは、三人称のジョンソンであって、一人称のジョンソンではない。ジョンソンは「あなた」ひとりひとりの魂の奥深くにまで、その嘲笑の鋒先を向けるけれども、カトリックたる三人称のジョンソンは、たとえ同胞のカトリックが教皇主義者として、錬金術をはじめとするオカルト魔術信奉者や急進派ピューリタンとともに、風刺の地雷で吹き飛ばされようとも、あくまで三人称のジョンソンであり続け、どたばた芝居を操る「筆者」に留まるのである。自らのカトリック信仰が、世紀の変わり目の英国カトリック教会とは相容れないものであったとき、部屋の扉を閉ざし、自らの魂の部屋で神に祈る、一人称ジョンソンの信仰に苦さを感じることはできないだろうか。

註

- 1) Herford and Simpsons, "The Stage History," 223.
- 2) イエイツ、『シェイクスピア最後の夢』所収「続編 シェイクスピアの〈後期の劇〉とベン・ジョンソン」165-194. 参照。
- 3) Herford and Simpson, "The Alchemist," 88-89.
- 4) Ben Jonson, *The Alchemist*, II. vi. 19-24. 小田島, 311. 以下テキストは、C. H. Herford and Percy Simpson、翻訳は小田島による。

- 5) イエイツ、『シェイクスピア最後の夢』173.
- 6) Clulee, 87.
- 7) Harkness, 159.
- 8) Harkness, 160.
- 9) *The Alchemist*, II. ii. 83-86. 小田島、270.
- 10) Harkness, 160.
- 11) Schuler は、「ハイデルベルクのある錬金術師が、玉子1個と、少量の鉄屑とで賢者の石を作った」(II. v. 69-71. 小田島、308-309) とする言及について、これをドイツにおける再洗礼派の地理的拡大へのあてこすりであるとする。Schuler, 207.
- 12) *The Alchemist*, II. i. 80-86. 小田島、269-270.
- 13) Mebane, 85, 152.
- 14) Harkness, 147.
- 15) Clulee, 204-220, Harkness, 201.
- 16) *The Alchemist*, III. ii. 102-106、小田島、325-326. 但し“divine secret”については、小田島訳の「聖なる」を「神の」に替えてある。
- 17) Kassell, “The Food of Angels,” 354-355.
- 18) *The Alchemist*, IV. i. 89-91.
- 19) Clulee, 204.
- 20) Harkness, 56-57.
- 21) Clulee, 204-205.
- 22) Clulee, 205. Harkness, 21-22
- 23) *The Alchemist*, I. i. 97. 小田島、235.
- 24) *The Alchemist*, I. ii. 36-41. 小田島、245.
- 25) *The Alchemist*, IV. vii. 79-82. 小田島、404.
- 26) Harkness, 22-23.
- 27) Pereira, *The Alchemical Corpus*, 39.
- 28) Herford and Simpson, “The Alchemist,” 91. Debus, 101 は、Cornellius de Lanney の例を挙げている。
- 29) *The Alchemist*, III. II. 86-87. 小田島、325.
- 30) *The Alchemist*, I. i. 168-169. 小田島、240.
- 31) Harkness, 20.
- 32) *The Alchemist*, I. i. 111-114. 小田島、236.
- 33) Geoghegan, 10. Herford and Simpsons, “Play Commentary,” 58-59.
- 34) 33 Henry VIII, c. 23. Elton, 80-83.
- 35) Traister, 81-96. Kasseell, “The Food for Angels,” 345.
- 36) *The Alchemist*, Prologue, 19. 小田島、228.
- 37) *The Alchemist*, IV. vi. 46-48. 小田島、398.
- 38) Herford and Simpsons, “Play Commentary,” 107.
- 39) *The Alchemist*, I. iii. 52-54. 小田島、259.
- 40) Herford and Simpsons, “Play Commentary,” 65-66.
- 41) Traister, 102.
- 42) *The Alchemist*, I. iii. 63-68. 小田島、259.
- 43) Herford and Simpsons, “Play Commentary,” 66.
- 44) Traister, 61.
- 45) *The Alchemist*, I. ii. 128. 小田島、251.
- 46) Siraisi, 205.
- 47) Traister, 110-111.
- 48) Traister, 111.
- 49) Traister, 6.
- 50) Traister, 47.
- 51) Kassell, “The Food of Angels,” 347.
- 52) Kassell, “The Food of Angels,” 347.
- 53) Traister, 111.
- 54) Kassell, “The Food of Angels,” 347.
- 55) Traister, 114.
- 56) 森ゆかり別稿参照。
- 57) Traister, 112-113.
- 58) Abraham, 145.
- 59) Kassell, “The Food of Angels,” 354, Kassell, “Reading for the Philosopher’s Stone,” 141.
- 60) Kassell, “The Food of Angels,” 354, 378. Ms. Ashmole 1494, fol. 623.
- 61) *The Alchemist*, II. i. 80-85. 小田島、269-270.
- 62) Tyacke, 437-438.
- 63) Ashmole, A4v.
- 64) Ashmole, B1r.
- 65) Ashmole, B1v.
- 66) Ashmole, B1v.
- 67) Kassell, “The Food of Angels,” 370.
- 68) Kassell, “The Food of Angels,” 370.
- 69) Ashmole, B1v. “St. Dunston”の著作については、Kassell, “The Food of Angels,” 361-364 を参照。
- 70) Kassell, “The Food of Angels,” 363.
- 71) Kassell, “Reading for the Philosopher’s Stone,” 133.
- 72) Roger Bacon, 627.
- 73) Getz, 145.
- 74) Getz, 143-145.
- 75) *The Alchemist*, II. i. 57-61. 小田島、268.

- 76) Duncan, 436. *Rosarium*, Lib. II, cap. xxxi.
- 77) Pereira, "Mater Medicinarum," 30.
- 78) Pereira, "Mater Medicinarum," 30.
- 79) Crisciani, "Black Death," 15.
- 80) *The Alchemist*, II. i. 63-75. 小田島, 268-269.
- 81) Traister, 26.
- 82) Traister, 81-96, Kassell, "The Food of Angels," 345.
- 83) Kassell, "The Food of Angels," 351. フォーマンが行ったペストの具体的な治療法については、Traister, 46を参照のこと。
- 84) Cerasano, 156.
- 85) Ben Jonson, 408. Herford and Simpsons, "Stage History," 226.
- 86) Traister, 59.
- 87) イエイツ、『最後の夢』184, トレイスター、186, 204も参照。
- 88) Schuler, 183, 187.
- 89) van den Berg, 10.
- 90) *The Alchemist*, prologue, 19.
- Florence: Societa Internazionale per lo Studio del Medioevo Latino, 1998. 7-39.
- Debus, Allen G. *The English Paracelsians*. New York: Watts, International, 1966.
- Duncan, Edgar H. "Jonson's Use of Arnold of Villa Nova's *Rosarium*" *Philological Quarterly* 21 (1942): 435-438.
- Elton, G.R. *The Tudor Constitution: Documents and Commentary*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press, 1982.
- Geoghegan, D. "A Licence of Henry VI to Practice Alchemy." *Ambix* 6 (1957): 10-17.
- Getz, Faye Marie. "To Prolong Life and Promote Health: Baconian Alchemy and Pharmacy in the English Learned Tradition." *Health, Disease and Healing in Medieval Culture*. Ed. Sheila Campbell, Bert Hall and David Klausner. Basingstoke: Macmillan, 1999. 141-151.
- Harkness, Deborah E. *John Dee's Conversations with Angels: Cabala, Alchemy, and the End of Nature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- Herford, C.H. and Percy Simpson. "The Alchemist," *The Works of Ben Jonson*. Volume II. Oxford: Clarendon Press, 1925. 87-110.
- Herford, C.H., Percy and Evelyn Simpson. "Play Commentary: *The Alchemist*" *The Works of Ben Jonson*. Volume X. Oxford: Clarendon Press, 1950. 46-116.
- "Stage History of the Plays: *The Alchemist*." *The Works of Ben Jonson*. Volume IX. Oxford: Clarendon Press, 1950. 223-240.
- Jonson, Ben. *The Works of Ben Jonson*. Volume V. Ed. C.H. Herford and Percy Simpson. Oxford: Clarendon Press, 1937. 46-116.
- ベン・ジョンソン『ヴォルポーネ 錬金術師』エリザベス朝演劇集 II 小田島雄志訳 東京:白水社、1996年。
- Kassell, Lauren. "The Food of Angels': Simon Forman's Alchemical Medicine." *Secrets of Nature: Astrology and Alchemy in Early Modern Europe*. Ed. William R. Newman and Anthony Grafton. Cambridge, Mass: The MIT Press, 2001. 345-384.

引用文献

- Abraham. Lyndy. *A Dictionary of Alchemical Imagery*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Ashmole, Elias. *Theatrum Chemicum Britannicum*. 1652 Rept. Kila, Montana: Kessinger Publishing, n.d.
- Bacon, Roger. *The Opus Majus of Roger Bacon*. Trans. Robert Belle Burke. 2 Vols. Bristol: Thoemmes press, 2000.
- Cerasano, S.P. "Philip Henslowe, Simon Forman, and the Theatrical Community of the 1590s." *Shakespeare Quarterly* 44 (1993):145-158.
- Clulee, Nicholas H. *John Dee's Natural Philosophy: Between Science and Religion*. London: Routledge, 1988.
- Crisciani, Chiara and Michela Pereira. "Black Death and Golden Remedies: Some Remarks on Alchemy and the Plague." *The regulation of Evil: Social and Cultural Attitudes to Epidemics in the Late Middle Ages*. Ed. Agostino Paravicini Bagliani and Francesco Santi.

- . “Reading for the Philosopher’s Stone.” *Books and the Sciences in History*. Ed. Marina Frasca-Spada and Nick Jardine. Cambridge: Cambridge University Press, 2000. 132-150.
- Mebane, John S. *Renaissance Magic and the Return of the Golden Age*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1989.
- 森 ゆかり “For here, he doth not fear, who can apply” ベン・ジョンソン『錬金術師』における Geber’s Cook 愛知工業大学研究報告 37A (2001)所収。
- Pereira, Michela. *The Alchemical Corpus Attributed to Raymond Lull*. London: The Warburg Institute, 1989.
- . “Mater Medicinarum’: English Physicians and the Alchemical Elixir in the Fifteenth Century.” *Medicine from the Black Death to the French Disease*. Ed. Roger French, Jon Arrizabalaga, Andrew Cunningham and Luis Garcia-Ballester. Aldershot: Ashgate, 1998. 26-52.
- Schuler, Robert M. “Jonson’s Alchemists, Epicures, and Puritans,” *Medieval and Renaissance Drama in England* 2 (1985): 171-208.
- Siraisi, Nancy G. *The Clock and the Mirror: Girolamo Cardano and Renaissance Medicine*. Princeton: Princeton University Press, 1997.
- Traister, Barbara Howard. *The Notorious Astrological Physician of London: Works and Days of Simon Forman*. Chicago: The University of Chicago Press, 2001.
- バーバラ・H・トレイスター 『ルネサンスの魔術師』藤瀬恭子訳 東京：晶文社、1993年。
- Tyacke, Nicholas. *The History of the University of Oxford*. Volume IV: Seventeenth-Century Oxford. Oxford: Clarendon Press, 1997.
- van den Berg, Sara. “True Relation: The Life and Career of Ben Jonson.” *The Cambridge Companion to Ben Jonson*. Ed. Richard Harp and Stanley Stewart. Cambridge: Cambridge University Press, 2000. 1-14.
- フランセス・イエイツ 『シェイクスピア最後の夢』藤田実訳 東京：晶文社、1980年。

(平成14年3月19日受理)